

令和5年度 第1学期終業式式辞

蒸し暑い日が続くなかではありますが、本日、こうして全学年が一堂に会して1学期終業式を迎えることができました。たいへん感慨深いものがあります。

その一方で、九州北部地方や東北・秋田では集中的な豪雨により、多くの被害が発生し、お亡くなりになられた方もおられます。皆さんとともに、早期の復興を願うとともに亡くなられた方のご冥福をお祈りしたいと思います。

先ほどは表彰式、そして全国大会・インターハイ等に出場する人の壮行会を行いました。全国には手が届かなかったものの、近畿大会に出場する（出場した）人たちも多くいます。あらためて、日頃の練習、努力の成果が実ったことを讃えたいと思います。

高校3年生のなかには、すでに最後の大会を終えた人もいます。また、これからという人もいるでしょう。そうした大会の前には、よく悔いのない戦いと言ったりもしますが、このことは、大学入試当日の心境と共通する点も多いように思います。それまでの練習の成果、勉強の成果を出し切るという点においては同じです。

「平常心」「無我夢中」「精一杯」などの言葉を使ったりもしますが、私は、何の打算もなく、迷いもなく、その瞬間、その瞬間のみに集中できるかどうか重要だと考えています。その瞬間のみに集中することは容易ではなく、日頃の練習や学習において鍛錬されたうえで成し得る境地です。

「勝ちに不思議の勝ちあり、負けに不思議の負けなし」という言葉があります。「負けるときは、負けにつながる必然的な要因がある（不思議な点はない）。」しかし、「勝つときには、（どうして勝ったのかどうも思い当たらないという）不思議な勝ちがある。」ということです。

無意識のなかでその瞬間に集中できたときに、不思議と実力以上の力が発揮され、勝ちにつながったり、うまく事が進んだりすることが必ずあると思っています。私自身もこれまで何度か、その不思議に出会ったような気がします。君たちの人生においても、その不思議に出会ってほしい。そのためにも、自分に厳しく、日々の鍛錬を大切にしてください。

昨日までの三者懇談の際、本校の進路指導部や昨年の高Ⅲ学年の方で作成された「合格体験記」が配られました。目をとおしましたか？

私は、これまで勤務した高校で「合格体験記」を見てきましたが、奈良学園の「合格体験記」は特に素晴らしいと思っています。というのも、すべてに真摯で、多くの時間を費やした自学自習の姿勢が見られ、一人一人の学習方法にオリジナリティを感じるからです。そして、合格体験記を書ってくれた卒業生

の多くは、先輩の「合格体験記」に刺激を受けているケースが多いようにも感じています。

その一部を紹介します。

- ・模擬テストなどで自分はどのような点数の落とし方をしているかを調べましょう。ミスなら、なぜそのミスをしたのか、何を理解していなかったのか、知らなかったりしたのはなぜかというところまで突き詰めることで成績を伸ばすことができます。

先ほど話をした「負けに不思議の負けなし」につながることで、「ミスに不思議のミスなし。」一つ一つのミスを理解し、克服することの大切さを教えてくれています。

その他に、今年（42期生）の体験記には比較的少なかったのですが、例年、日々の授業に触れているものがあります。

- ・高皿になってから本格的な受験勉強となるわけですが、中学校から自学自習の習慣をつくるのが大切。そして、授業を大切にします。

このことは多くの卒業生が言っています。

- ・授業をしっかり聞く・・・漠然としているので具体的にいうと・・・

「先生の頭に入り込むような感覚」をもって授業を聞いていた。先生がどんな思考回路で問題や事象を捉えているのかをくみ取りながら聞く。

- ・中学生の時期に一番大切なのは自学自習の習慣をつくること。

その方法はそれぞれとしながらも、彼は「まとめノート」を作った。」ことを具体的に書いてくれています。

授業の記憶が薄れないように、できるだけ授業のあったその日のうちに「まとめノート」を作成する。授業のノートの丸写しではなく、文章は端的にして、自分でわかりやすくアレンジして振り返る。そうすることで、授業内容の理解（インプット）とその内容を自分の力で表現する（アウトプット）が同時にできて、後に自分オリジナルの参考書になる。

私はこれらの体験記を読んだときに、京都大学名誉教授で細胞生物学者で、歌人でもある永田和宏氏の『知の体力』という本を思い返していました。

「人の話は、能動的に聞いてこそ、自らの身につくものである。話された内容をただひたすらに覚えようとしたり、吸収しようとしているだけでは、却ってその知識は自分のものとならない。「能動的に聞く」とは、話された内容を、自らのこれまでの知の体系のなかに位置づけることであり、位置づけるためには、聞きつつ常に自分の知の体系を確認し、照合する作業を伴うはずである。外部からインプットされる内容と、自らの知識との間に軋轢が生じるのは当然であり、その軋轢こそが質問を促す力となる。」

と、述べておられます。

さて、明日から夏休み・・・といえども、夏期講座・補講等で7月末までは普段どおり登校することになります。学年によっては、外部からの講師や本校卒業生による講演会など、有意義な学びの機会が計画されています。また、成績が振るわなかった人は補習等もあります。それぞれの学びを自分のものにして欲しい。

夏休みを終えると、二学期には文化祭が予定されています。こうしたイベントを開催するときには、5類に移行されたとはいえコロナ感染が気になるところです。この夏、全国的に増加することが予想されますので十分に気をつけてください。

今年の文化祭は、昨年までとは違った形で、来場者も増やす方向で文化祭実行委員の皆さんを中心に準備をしてくれています。後ほど、実行委員の方から君たちに話があるようですが、その意図をしっかりと理解して、素晴らしい文化祭を創り上げてくれることを期待しています。

最後に、高皿生の皆さん、この夏の大きな飛躍を期待しています。必ず、夏を制してください。

どうか、皆さんが事故なく過ごし、元気に二学期を迎えてくれることをお願いして、私の話を終わります。

以上